



会 報

東北大学教育学部
同窓会

拡がり深まる教育学部の活動



東北大学教育学部長 小 嶋 秀 樹

2024 年 4 月に教育学部長および教育学研究科長を拝命いたしました。微力ながら本部局の更なる発展に加え、同窓会長として同窓生・在学生・現旧教員の交流促進に努めていきたいと存じます。

2024 年 9 月に「東北大学教育学部交流会」を川内キャンパスにて開催し、多くの方々のご参加をいただきました。同窓生の方々からの個性的なスピーチは、在学生にとって、それまで「遠い先輩」だった方々の多様な活躍を身近に感じとるよい機会となったようで、その後の自由懇談も大変盛況でした。また、ご参加いただいた同窓生のみなさまからは「久しぶりの旧友との再会を楽しめた」とのご感想もいただいております。本交流会にご参加いただいた方々に深く感謝いたします。今後もこのような縦・横のつながりを紡ぎ、織り合わせていきたいと存じます。

さて、みなさまも報道等でご存じかと思いますが、2024 年 11 月に東北大学は「国際卓越研究大学」に正式認定されました。学術研究における日本の国際的な競争力を高めるための長期的な取り組みです。今後、東北大学は全学を挙げて、国際的な研究力強化を推進していきます。もちろん教育学部・教育学研究科も例外ではなく、国際共同研究の推進や国際的な研究発信の強化、そして教育・研究指導の国際化・学際化を進めていく所存です。

部局活動の国際化については、開始から 10 年を経過した AELC（アジア教育リーダーコース）がその方向

性を示唆しています。この AELC は、日本・中国・台湾・韓国の 5 大学の学生が、夏と冬にホスト大学（持ちまわり）に集まり、英語での集中講義（3 講義×15 回×90 分）を受けるというものです。今夏は東北大学に計 55 名の学生が集まり、座学だけでなくフィールドワークを含めた諸活動に取り組みました。この 10 年間で累計 600 名の参加を得ています。

部局活動の学際化は本部局の「ウリ」のひとつです。理系出身の教員が 23%を占めていることは、このような特色化の一端を示しています。私自身も理系出身であり、情報技術を活用した自閉症療育を研究テーマとしています。具体的には、視線や表情をやりとりできるシンプルなロボットを、療育センターにおける療育活動に資するかたちで活用するというものです。このほかにも、近年発展が著しい大規模言語モデル（生成 AI）を大学教育に活用する方法の研究も、複数の部局教員が実施しています。記述式問題の自動採点技術の研究や、生成 AI との対話によって学習者の自己省察を促す研究などが例として挙げられます。

上述した国際化・学際化によって、教育学部・教育学研究科は大きく変革していくことでしょう。その一方で私たちは、教育の本質を究めようとするこれまでの多様な取り組みを確実に継承し、発展させ、未来の教育に資する存在でありつづけたいと考えています。これからもご支援・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

教育学部在学中の 思い出



佐藤 庸太郎 (1958 年卒)

当時の私は、両親が既に亡く妹は病弱。そんな境遇で、私は教育学部へ進学しました。案の定、生活費や授業料に事欠く始末で、アルバイト等で糊口を凌ぐといった状態でした、今思うと全く無謀でした。

そんな中で、私の忘れがたい講座が二つあります。

その一つは、塚田 毅教授の教育心理学の講座です。口角飛沫といった情熱的な先生でした。

フラストレーション・トレランス：補償・昇華・退行・白日夢・合理化等。ハローエフェクト・ピグマリオン効果・条件反射・ロールシャッハなどの用語が、次々と私の脳裏に浮かんでまいります。また、レビンの、 $B = F(P \cdot E)$ の行動理論は、私の教員在職中の生徒指導等に役立ったように思います。

二つ目は、第2外国語のドイツ語講座です。

^{かくしやく} 矍鑠とした風貌の高坂 義之教授です。教科書は、確か”DAS・HEXEN・KIND”という初級者用の教材だったと思います。私は多忙な中で、予習復習を真面目にやり授業に臨みましたが、テストの後に、成績上位者を貼り出してくれましたが、これを目指して頑張っていたようです。単純な話です。

ただここで学んだ知識は、私の退職後にドイツ語圏を旅行した際、片言の会話等に役立ったようです。

私はストレスの解消として、時々一番町角の「田園」という喫茶店で、ベートーヴェンの「第九」を聴いていました。今でも年末には必ず聴きますが、四楽章で、ソリストが”Freude Schöner Götterfunken・・・”と歌い出すと、ドバツと鳴咽してしまいます、理由はわかりません。

私は 90 歳の高齢者ですが、教育学部で学んだ学問や資格は私の人生を支えてくれたと思っています。

母校教育学部のますますの充実発展を心から祈念いたします。

「細谷構想」のこと —校友歌「緑の丘」によせて—



横館 厚太 (1967 年卒)

東北大学教育学部設置 75 周年、創生期を振り返ってみた。初代教育学部長細谷恒夫氏は後に「細谷構想」と称される次のような学部創設方針を立てた。(義務教育教員養成を含む教育学部だった。)

それは、①教育に関する高い水準を持った原理的研究と教育の実際を行い得るような組織と 人員を整備すること、②教育学部の学生にできるだけ他学部の学生と同様な待遇を与え、教員 希望者に高い誇りを持たせるようにすること、③従来の師範学校の風潮を一掃して自由な研究 と信念を育成する学風を確立したいこと(東北大学百年史編集委員会 2003)であった。まさに、幅広い教養と真理探究の研究的態度の会得を企図した教員養成を目指していたと解せる。

理想の教師像を描いて入学したのが‘63 年だった。しかし数年後だった。制度改革の議論を経て教員養成課程は分離されることになる。学内は連日のように揺れていた。動揺する学生の声を時の学部長(第6代)林 竹二氏は真摯に受け止めて学生と討議、行動も共にした。先生はソクラテスを理想とする対話の教育者だった。「学んだことの唯一の証は、何かが変わることだ」の名言～その精神は現在の東北大学教育学部にも脈々と受け継がれている～今回の会で私が再確認したことだ。

9月末、2年振りの「交流会」に参加した。まさに「対話」時間だった。現・教育学部長 小嶋秀樹氏のガイダンスは変革期を迎えての学際化・国際化の取り組みが参加者の心に響いた。小川氏、小林氏のスピーチはコミュニケーションの大切さ、報道編成～現場の報告など、同窓生の心意気が伝わった。そして在学生との懇談、心躍るとはこのことだ。研究者への道を歩む語る人、悩みを口にしながらも何かをつかんでいる人～この姿を見るために私はここに来た。うれしかった。

‘67 卒業、上京し4区7校での小学校勤務を経て退職した。当時東北大出身者はまわりに皆無、定年間近になって関東地区同窓会を知る。Reunion はやはりいい。—いつか杜の都仙台はふるさとになっていく—

同窓会 世代を超えた 懸け橋に



米富 尚 (1994 年卒)

今回の交流会のプログラムの中で自由懇談の時間が設けられていたのは、ざっくばらんに在校生と卒業生とがコミュニケーションを取れる良い機会であったと思う。在校生からは進路や将来のことについての質問が多かった。「学生時代の勉強は社会人になってから役に立つか？」学生から出た質問である。その問いに対し、正直役立っていないと答えた。しかし、それはあくまで学んだことや研究したことが「直接」役立つ場面は少ないという意味である。例えば論文を書く場合、自分なりの仮説を立て検証し、結論へと導くまでの過程には、大なり小なり PDCA を回している。そういった考察する経験を積んでいることは決して無駄にならないであろう。業種に違いはあれど、それを繰り返すことによって成長に繋がるという説明をしたことを補足しておく。

他には、「どういう学生時代であったか？」という質問もあった。個人的な話をする当時、教育学部には「自主ゼミ」というグループが複数存在しており、その一つに私は所属していた。自主ゼミというのは、自分の興味を持った（教育に関する）テーマのレジュメを作成し、メンバーの前で発表をし、内容について討論をするというものである。先輩からの内容に関する指摘、質問に対する回答に上手く答えられないことも多々あったが、成長する良い経験ができたと感じている。また、上下の関係以上に自分にとってかけがえのない存在だと思っているのが、ゼミ内の同学年メンバーである。携帯電話やスマホがまだ普及していない時代のため、直接会い（時には酒を交わしながら）コミュニケーションを取る機会が多かった。そのメンバーとたまに会えば、当時にタイムスリップしたような感覚にもなる。卒業後 30 年以上経った今でも彼らと繋がりを持っていることが自分にとって財産である。

交流会はこうした縦横の関係の醸成を図ることができる良い機会であると思います。交流会の継続的な開催を願うとともに、ますますの同窓会の発展及び学生の皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

教育学部交流会に 参加して



佐久間 啓彰 (教育学研究科博士課程後期 3 年)

同窓会交流会に参加したのは、2022 年度に続き 2 度目でした。私は学部から博士課程後期となった現在までずっと東北大学で過ごしており、多くの同期や先輩・後輩の卒業・修了を見送ってきた立場にあります。学部生の期間より大学院生としての期間の方が長くなってしまいましたが、学部時代は言わば「青春」であり、それを共有した友人には特別な想いがございます。今回の同窓会は、現在は東北大学事務として働く学部・博士課程前期時代の同期と久々に会うきっかけとなりました。それだけでなく、学部時代に自主ゼミなどで交流を重ねた 2 学年下の後輩とも再会でき、学部時代を懐かしむことができました。

旧友だけでなく、未知の卒業生と出会えることも交流会の大きな魅力の一つです。同窓会に出席した卒業生の多くが、社会人として活躍していらっしゃる、もしくは社会人を真っ当された方々です。研究業界に簞りがちな私にとって、民間企業や公務員として活躍する方々のお話は刺激的でした。詳しくは書きません（「書けません」が正しい？）が、普段お世話になっている企業の裏話を聞き、大変な環境の中、第一線で働く方々に尊敬の念を抱きました。

また、本交流会には様々な世代の卒業生が集まります。それぞれの学生時代の話の聞いていると、時代による違いを感じる以上に、「学生内のあの謎の文化はそんなに昔からあるのか」という意外な伝統(?)の発見などもあることが面白いところでした。

「東北大学教育学部で学んだ」という事実は、時代を超えた強い繋がりをもたらしてくれます。これも教育学部の先輩たちが伝統を積み重ねてくださったおかげです。私もその流れに続けるような活躍ができるようにと、身の引き締まる思いです。

最後に、この度の同窓会を運営して下さった同窓会の方々、教員、事務の方々に感謝申し上げます。次は私も在学生の手本となる卒業生・修了生として参加できるよう、精進いたします。

2024 年度東北大学教育学部同窓会支援事業採択者からのご報告

11月30日現在

I. 卒業研究学会発表援助事業

本研究科大学院生(博士課程前期2年の課程)が、国内外の学会において、個人の卒業研究の発表を行う場合に、そのために必要とされる交通費・宿泊費・大会参加費等（以下、「学会発表費」とする）を援助するもの。

福田大夢（臨床心理学コース）

○用務内容

本出張の目的は、日本ブリーフセラピー協会第16回大会における卒業研究発表および自主企画シンポジウム発表であった。研究発表は、「ひきこもり者を持つ家族のソーシャル・サポートと受療行動に関する研究」というタイトルで講演した。自主企画シンポジウムは「ブリーフセラピーと対人関係療法で見る人間関係！ ― 関係性の見方のススメ ―」というタイトルで発表の一部を担当させていただいた。学会開催期間は令和6年8月31日～令和6年9月1日であった。朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターにて開催予定であったが、台風10号の影響で学会がオンライン開催になった。

○成果

今回、卒業研究をオンデマンド動画形式で発表し、多くの先生方から研究内容についてのご質問やご指摘をいただき議論することができました。ご指摘をいただいた中で、自分の考察を多角的に振り返る機会となり、今後の研究の発展を見通すことができました。私の研究テーマはまだ発展が進んでいないこともあり、今後の展開に悩んでいたところに示唆に富むご指摘をいただいたという点で、貴重な機会であったと感じます。また、対人関係療法の自主企画シンポジウムの発表の一部も担当させていただき、貴重な体験となりました。今回、このような発表の機会を得られたことに心より感謝申し上げます。

II. 博士論文執筆援助事業

本研究科大学院生が、博士論文執筆のための調査、出張等を行う場合に、そのための印刷、郵送費及び交通費等を援助するもの。

小俣 岳（教育情報アセスメントコース）

○用務内容

大学入試学会第1回大会への参加、および運営

○成果

学会設立の発起人として参加しており、今回大会では運営補助を中心に行った。大会運営のための様々な準備や事後処理等、東北大学の学会運営事務局の一員として行動することができた。

また、学会参加者との交流するなかで当方の博士論文完成後にその内容を発表して欲しいとのオファー（広島大学高等教育研究開発センターのみなさまより）もあった。自身の博士論文の内容を手短に話す機会も多く生まれ、改めて論文完成に向けてモチベーションを上げることもできた。

2023 年度 東北大学教育学部同窓会事業報告

● 現役学生に対する諸援助事業

・ 博士論文執筆援助事業 ・ 海外学会発表渡航費援助事業 ・ 卒業研究学会発表援助事業 ・ 学部学生会参加援助事業

● 現役学生を対象とするキャリア・セミナー事業

● 2023 年度卒業・修了学生の祝賀会援助事業

● 同窓会会報発行事業

● その他、会員の親睦を図る事業（会員相互交流促進事業）

2023 年度 東北大学教育学部同窓会会計決算報告

【収入の部】

事 項	予算額	決算額	増減	備 考
前年度繰越	7,675,876	7,675,876	0	
学部生入会金・会費	370,000	350,000	▲ 20,000	35 名×10,000 円
修士入会金及び会費	110,000	86,000	▲ 24,000	入会 13 名×6,000 円 継続 2 名×4,000 円
博士入会金及び会費	28,000	20,000	▲ 8,000	入会 1 名×8,000 円 継続 2 名×6,000 円
預金利息	3	8	5	
同窓会総会懇親会参加費	0	0	0	
合 計	8,183,879	8,131,884	▲ 51,995	

【支出の部】

事 項	予算額	決算額	増減	備 考
通信費	16,500	2,240	14,260	理事会資料郵送
会議費 理事会	14,000	0	14,000	
旅費 理事会出席旅費	60,000	0	60,000	
印刷費 同窓会入会案内印刷	30,800	30,800	0	
会報第 1 号印刷	25,000	62,449	▲ 37,449	
事業費				
海外学会発表渡航費援助事業	210,000	0	210,000	
卒業研究学会発表援助事業	150,000	120,000	30,000	
学部学生会参加費援助事業	150,000	0	150,000	
博士論文執筆援助事業	200,000	0	200,000	
会員相互交流促進支援事業	30,000	8,866	21,134	
教育学部本部同窓会総会	0	0	0	
令和 5 年度卒業・修了祝賀会	70,000	0	70,000	
事務費				
会費徴収払出料	12,000	9,688	2,312	ゆうちょ銀行
その他事務費	40,000	4,290	35,710	振込手数料 4,290 円
合 計	1,008,300	238,333	769,967	

2024 年度へ繰越額	収入決算額	支出決算額	残額	備 考
	8,131,884	238,333	7,893,551	

※参考

単年度ベース収支合計 (前年度繰越分を除く)	収入決算額	支出決算額	残額	備 考
	456,008	238,333	217,675	

会計監査報告

令和 6 年 8 月 19 日

関係書類を監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

令和 6 年 8 月 19 日

監事 小野瀬美佳 

監事 中川 典雄 

2024 年度 東北大学教育学部同窓会事業計画

● 現役学生に対する諸援助事業

・博士論文執筆援助事業 ・海外学会発表渡航費援助事業 ・卒業研究学会発表援助事業 ・学部学生学会参加援助事業

● 現役学生を対象とするキャリア・セミナー事業

● 2024 年度卒業・修了学生の祝賀会援助事業

● 東北大学教育学部交流会 2024 の共催

● 同窓会名簿の整理に関する事業

● その他、会員の親睦を図る事業（会員相互交流促進事業）

2024 年度 東北大学教育学部同窓会会計予算

【収入の部】

事 項	前年度予算額	予算額	増減	備 考
前年度繰越	7,675,876	7,893,551	217,675	
学部生入会金・会費	370,000	350,000	▲ 20,000	35 名×10,000 円（2021～2023 実績の平均）
修士入会金・会費	110,000	98,000	▲ 12,000	入会 15 名×6,000 円 継続 2 名×4,000 円 （2021～2023 実績の平均）
博士入会金・会費	28,000	22,000	▲ 6,000	入会 2 名×8,000 円 継続 1 名×6,000 円 （2021～2023 実績の平均）
預金利息等	3	8	5	預金利息等は前年度実績より
合 計	8,183,879	8,363,559	179,680	

【支出の部】

事 項	前年度予算額	予算額	増減	備 考
通信費	16,500	2,240	▲ 14,260	2023 年度決算額参考
会議費	14,000	14,000	0	理事会等食事代（2023 年度予算額と同額）
旅費	60,000	60,000	0	理事会・支部総会出席（2023 年度予算額と同額）
印刷費	55,800	93,249	37,449	入会申込案内、会報印刷（2023 年度決算額より）
事業費				
海外学会発表渡航費援助事業	210,000	210,000	0	3 名×上限 7 万円
卒業研究学会発表援助事業	150,000	150,000	0	5 名×上限 3 万円
学部生学会参加費援助事業	150,000	150,000	0	5 名×上限 3 万円
博士論文執筆援助事業	200,000	200,000	0	4 名×上限 5 万円
会員相互交流促進支援事業	30,000	30,000	0	3 団体×上限 1 万円
R5 年度卒業・修了祝賀会	70,000	70,000	0	会場費等として（2023 年度予算額と同額）
教育学部交流会	0	40,000	40,000	
事務費				
会費徴収手数料	12,000	12,000	0	郵便振替手数料・ゆうちょ銀行へ
その他事務費	40,000	40,000	0	アルバイト謝礼、振込手数料含む
小 計	1,008,300	1,071,489	63,189	
翌年度繰越見込額	7,175,579	7,292,070	116,491	
合 計	8,183,879	8,363,559	179,680	

参考

事 項	収入予算額	支出予算額	残額	備 考
単年度ベース収支合計見込 （前年度繰越分を除く）	470,008	1,071,489	▲ 601,481	

心理支援センターにおける能登半島地震被災者への支援

1 月 1 日に発生した能登半島の広い地域で大きな被害が生じたことを受け、本研究科心理支援センター（若島孔文センター長）が中心となり組織化を進めている災害心理社会的支援に関する大学間ネットワーク（※）では、被災者に対するオンラインカウンセリングの窓口を開設しました。また、災害心理社会的支援に関する基礎知識の習得を目的としたオンラインセミナーを YouTube にて公開し、希望者に対して修了証の認定および緊急時連絡先リストへの登録について案内を行いました。

※災害心理社会的支援に関する大学間ネットワーク：東北大学大学院教育学研究科心理支援センター／名古屋大学こころの減災研究会／岐阜大学地域減災研究センター／香川大学医学部臨床心理学科災害対策検討委員会／室蘭工業大学前田研究室／北海道教育大学釧路校浅井研究室／徳島大学大学院社会産業理工学研究部横谷研究室

OECD 教育・スキル局一行が本研究科を訪問されました

OECD 教育・スキル局の Andreas Schleicher 局長が、3 月 15 日に教育学研究科を訪問され、「日本 OECD 共同研究」について、野口研究科長・小嶋副研究科長ほかと意見交換をされました。本研究科を訪問されたのは、OECD 教育・スキル局の Schleicher 局長のほか、Miho Taguma シニア・アナリスト、Satoshi Hatta アナリストと、これまで OECD と協働されてきた東京学芸大学の荻上健太郎先生です。ご一行は、片平キャンパスにて大野総長と懇談された後、川内キャンパスの教育学研究科にて具体的な共同研究テーマについての意見交換を行いました。教育学研究科がこれまで推進してきた研究テーマに加えて、生成 AI の教育への活用指針・方法や、災害等に対する教育機能のレジリエンスといった、喫緊の課題についても議論を深めることができました。ご一行は、その後、災害科学国際研究所などを訪問され、未来の教育に関する OECD と東北大学との学際的な協働に向けたネットワーク基盤構築の第一歩となりました。



伊藤文人講師が 2024 年度科学技術分野の 文部科学大臣表彰「若手科学者賞」を受賞しました

4 月 9 日に公表された 2024 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰において、東北大学から、科学技術賞研究部門 5 件、若手科学者賞 10 名、研究支援賞 1 件の受賞が決定しました。教育学研究科からは伊藤文人講師が「ヒトの社会的相互作用を支える認知神経基盤の研究」に関する業績が高く評価され、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた 40 歳未満の若手研究者を対象とした「若手科学者賞」を受賞されました。また、伊藤講師は、東北大学の若手教員のうち、その専門分野において高い業績を有するものに付与される「東北大学ディスティングイッシュトリチャー」称号を付与されました。同人の今後ますますのご活躍が期待されます。



ユネスコ北京事務所と覚書を締結しました

8 月 12 日、東北大学大学院教育学研究科とユネスコ東アジア地域事務所（UNESCO 北京事務所）の協力に関する覚書が、UNESCO 北京事務所の夏 Dr. Shahbaz Khan 所長と東北大学教育学部長・大学院教育学研究科研究科長の小島秀樹教授によって北京で正式に調印されました。東北大学教育学部・大学院教育学研究科からは劉靖准教授、学生代表 8 名、UNESCO 北京事務所教育プログラムオフィサーの Robert Parua 氏、自然科学プログラムオフィサーの杉浦愛氏が出席しました。本覚書の締結は教育、科学、文化、持続可能な開発プログラムの分野における両機関の協力のための強固な基盤を築くものです。この覚書は、国連教育変革、国連の持続可能な開発目標（SDGs）、特に持続可能な開発目標 4（SDG4）、教育 2030 アジェンダに対する両機関の強いコミットメントを強調します。両機関の戦略的パートナーシップは、気候変動、海洋科学、環境保護、持続可能な開発のための教育、教員養成、災害リスク軽減の分野に焦点を当て、ユネスコと日本の東北大学の技術的専門知識と経験を最大限に活用することが期待されます。調印式後、出席された学部生 7 人による日本の教育制度、教員の現状、ICT と教育の融合、課外活動についてのプレゼンテーションも行われました。参加者は日本の教育の現状とユネスコの活動について議論し、今後の協力に向けた貴重な洞察を得ました。意見交換での活発な対話と意見交換により、両機関の緊密な協力関係がさらに強化されました。



「教育学部交流会 2024」を開催しました

教育学部・教育学研究科では、9月28日（土）ホームカミングデーの午後、川内キャンパス文科系総合研究棟2階各教室を会場として「東北大学教育学部交流会2024」を開催しました。この交流会は一昨年に続き2度目の開催で、同窓生16名、在校生14名および教職員13名の参加がありました。

はじめに、小嶋研究科長・同窓会長から教育研究の学際化・国際化および国際卓越研究大学の実現に向けて報告がありました。次いで、関東地区同窓会代表の横館厚太様、同窓生代表の小川逸人様および小林直弘様より、在学中の思い出話や卒業後の歩み、在校生へのメッセージ等について挨拶がありました。

その後、5つのグループに分かれて行われた自由懇談では、研究内容や進路等について、予定の時間では短く感じられるほど活発に情報交換が行われ、光井正様の挨拶で会を締め括りました。

ご参加の皆様がこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。



会 長	小嶋 秀樹
副会長	鹿野 毅 (1968 年卒) 星 永楊 (1966 年卒)
理 事	家根 敏明 (1957 年卒) 阿部 琢也 (1965 年卒) 岡崎 忠 (1965 年卒) 関口 隆 (1966 年卒) 光井 正 (1968 年卒) 渡邊 宣隆 (1968 年卒) 軍司 啓 (1968 年卒) 笹川智恵子 (1969 年卒) 阿部 孝 (1969 年卒) 吉川 邦彦 (1981 年卒) 加藤 邦治 (1987 年卒) 熊井 正之 (1994 年卒) 神谷 哲司 (1995 年卒) 吉植 庄栄 (1995 年卒) 後藤 武俊 (1998 年卒) 森 健吉 (1998 年卒) 松本 大 (2001 年卒)
監 事	中川 典雄 (1966 年卒) 小野瀬美佳 (1998 年卒)

文科系総合研究棟前の階段を 2024 年 9 月に改修しました。この階段は川内南キャンパスの写真スポットとして活用されてきました。引き続き多くの学生の思い出を写す場所となることを願っております。



外階段 (改修前)



外階段 (改修後)

同窓会本部の会報としてリニューアルしての 2 号目をお届けいたします。今回も、2024 年 9 月 28 日に開催された教育学部交流会について、ご参加いただいたみなさまからのご報告を中心にご寄稿いただきました。現役世代と OB・OG との世代を超えた交流から、それぞれ日常では得難い気づきも得られたように思われます。今後も定期的開催されるとのことですので、多くのみなさまのご参加を心待ちにしております。開催については、教育学部のホームページで周知されますので、夏前ごろからご留意いただけますと幸いです。

さて、みなさまもマスメディア等でご存じかと思いますが、11 月 8 日付けで、東北大学が国際卓越研究大学に認定されました。本研究科におきましても、現在、研究科長はじめ全教職員一丸となって対応を進めております。追って同窓会でも今後のことをご知らせできるかと思います。

同窓会のみなさまにおかれましては、急激な社会変動の中で変わりゆく本教育学研究科・教育学部に対し、常に暖かく、また時に厳しく、ご意見をお寄せいただけましたら幸いに存じます。また、教育学研究科・教育学部では「みらいの教育研究支援基金」としてご寄付をお待ちしております。これまでも多くのみなさまより、応援のお気持ちを届けていただいておりますこと、感謝申し上げますとともに、これからも母校の我々が教育学研究科・教育学部を応援する気持ちをお届けいただけますと僥倖です。ご寄付は東北大学基金のページ (<https://www.kikin.tohoku.ac.jp/>) で、寄付目的で「部局のプロジェクトを支援」を、使途で「教育学部・教育学研究科みらいの教育研究支援基金」をお選びいただければ大丈夫です。ご寄付はもちろん、叱咤激励のお言葉もいただきながら、さらなる「教育学」教育研究の研鑽に努めてまいります。引き続き応援・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます(K)。

東北大学教育学部同窓会事務局

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

tel 022-795-6103 (教育学部 総務企画係)

e-mail sed-alumni@grp.tohoku.ac.jp